

インターンシップ体験記（海外インターンシップの場合は英語で記入）

■ 参加企業と実施期間

株式会社アラヤにて、研究開発業務に関するインターンに、約3か月間参加した。オフィスのある東京に滞在し、対面での業務とリモート業務を組み合わせて実施した。

■ 実施に至る経緯

D2 の後半よりインターン参加を考え始め、研究と社会実装の両方を行っている企業を探し始めた。株式会社アラヤは意識に関する勉強をしていたときに知り、インターン募集をしていると聞き自主応募を通じて面接を受けた。一次面接では自身の研究や興味を持っていることについて話し、二次面接では指定された論文の内容と手元での実行に関する発表を行った。面接中～インターン開始までは、インターン募集ページにあった参考文献や、受け入れ研究者の方の論文を読むなどして、インターンに向けて準備を行った。

■ インターンシップの目的

参加目的として、以下の点をインターン参加前に設定した。

- ・企業において、研究とプロダクト開発をどのように両立させているかを知る。
- ・研究の内容だけでなく、研究をどう進めるかというメタな視点を持ち研究業務に取り組む。
- ・様々な人とのコミュニケーションを通して、自身の生き方を考える。
- ・異なる研究分野の研究者や研究者以外の方とのコミュニケーション能力を身に着ける。

■ 活動内容

最初の数週間にわたって、サーベイや議論をしながらテーマ策定を行った。テーマはマルチエージェントシステムにおける協調失敗の解明・介入に決まり、策定後は会社の研究者の方々と議論しながら実験と検証を進めた。インターン最終日には社内の研究者を主な対象として、英語にてプロジェクトの発表を行った。

■ 環境とコミュニケーション

自宅でのリモート業務を中心とし、週1回程度チームの方々と対面で話す機会があった。業務がある日はほぼ毎日 MTG を入れていただき、スムーズに研究を進めることができた。また、プロダクトの開発・セールスに関する MTG にも参加させていただき、エンジニアチームやセールス・マーケティングの方々ともコミュニケーションをとることができた。

■ 研究室とは異なる分野、業界で働いたことで得た体験・成長したポイント

異分野の研究者との協働を通して気づいた点としては、自身の思考が大学での専門性に非常に紐づいていることを再確認できたことである。主に神経科学や自然言語処理をバックグラウンドとする方と研究に関する議論を行ったが、思いつくポイントはみんな違っていたように思う。自身が発言する際も、相手が使う単語に翻訳しながら話すなど、工夫して話す必要がある。このようなコミュニケーションは普段の研究室でのそれと比較すると大変ではあるのだが、自身の幅を広げることにつながり、研究としても様々な角度から吟味されることでよいものになる。ここでは、ヒューマンウェアの融合研究の経験も活きたのではないかと感じる。

また、上述した通り、研究者以外の方を含むチームメンバと様々な会話ができたことも、非常に良い経験になった。皆さんがどういう思いで業務に取り組んでいるか、どういうキャリアを歩んできたか、などを知る中で、自身の修士修了後のキャリアを考えるうえでの大きな影響を受けた。な

インターンシップ体験記 （続き）

かでも一番印象的だったのは、チームとしての熱量を感じたことである。研究室での専門研究は指導教員の助けを借りつつも、基本的には一人で行ってきた。しかしプロダクトを開発し、それを世に出していくとなると、当然ではあるが、多くの人を巻き込んでやっていかなければならない。もちろん研究においても大型の研究は同様に、多くの研究者が協力する必要がある。このように大きなプロジェクトが進んでいくためには、ビジョンを共有し、そのビジョンを自分たちで達成していくんだ、という気持ちが重要だと感じた。インターンを通して、そのビジョンをどのように伝えていくかに関して、学ぶことができたと考えている。

■ 達成できなかった課題、それらを今後はどう生かすか

インターンの反省点として、まずは、限られた時間の中でのプロジェクトの情報管理が挙げられる。本インターンでは前半をテーマ策定に充てたため、実装や実験に充てる時間があまり多くはなかった。また、定例の MTG が毎日あったため、現在やっていることや結果を人に伝えるためにまとめる作業の頻度が高かった。その中で、まとめることにあまり時間を使わず、MTG での議論に不十分な状態で臨むことがあった。これは大きな反省点と考えている。対策として、プロジェクトの全体像を明言化し把握したうえで、現在の実装や実験がどの部分に当たるのかを常に意識し、情報を一元管理しながら研究を進めることが大事だと考えている。目の前の作業に必死になりすぎるのではなく、一步引いた冷静な視点を常に持つことが重要である。これらは、今後の研究や開発を行う上で特に意識したい点である。

さらに、インターンの期間内には、研究内容を对外発表するところまでは到達できなかった。研究テーマの策定からマルチエージェント協調失敗に関する一定の知見を得るところまではできたが、まだ検証すべき課題は残っている。現在も研究は継続しており、以上の反省点を活かしながら引き続き検証を進め、成果をまとめていきたいと考えている。

■ インターンシップの目的に対する振り返り

最後に、設定したインターン目的がどの程度達成できたかを振り返る。1 点目の「研究とプロダクト開発の両立を知る」については、日々の研究 MTG に加え、プロダクトの開発・セールスに関する MTG にも参加させていただいたことで、両者がどのように接続しているかを内部から具体的に知ることができた。2 点目の「研究を進めるメタな視点を持つこと」については、反省点の通り、道半ばであったと感じている。情報管理の甘さという課題は残ったものの、裏を返せば、この視点の重要性を痛感する良い機会になったとも言える。3 点目・4 点目の「自身の生き方を考えること」「異分野とのコミュニケーション能力を身に着けること」については、上述の通り、異分野の研究者やビジネスサイドのメンバとの対話を通じて、想像していた以上に多くの気づきを得ることができた。

■ まとめ

今回のインターンシップを通して、研究者としての専門性を深めるだけでなく、多様な背景を持つ人々とビジョンを共有しながらプロジェクトを推進していくことの難しさとおもしろさを、身をもって学ぶことができた。研究室での博士研究が基本的に一人で完結するものであったのに対し、プロダクトという形で成果を世に出していく過程では、多くの人を巻き込み、共感を得ながら物事を前に進めていく必要がある。今回得られた視点や反省点を糧に、残りの博士課程での研究、そしてその先のキャリアに向けて、引き続き精進していきたい。